



2003	早大学位記	報告番号
	3679	甲 乙 1835

3679-2

【課程内】

博士（人間科学）学位論文 概要書

## 結婚の原理とその論理構成

The principles and logics of marriage in  
contemporary society

2003年7月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

永田 夏来

Nagata, Natsuki

研究指導教員： 濱口 晴彦 教授

晩婚化や若者の性の自由化といった流れのなか、現代の日本社会において結婚とは何に根ざしているのか、という問いが共有されはじめている。結婚研究は戦前から文化人類学をはじめとした数多くの領域で成果が蓄積されており、「何のために結婚するのか」という機能的な議論についてはひとりの完成をみているといえるだろう。改めて結婚が何に根ざしているのかを考えていくためには、これまでの議論とは異なる前提を導入したうえで、新しいパースペクティブと理論的・方法論的な展開について考えていかななくてはならないのではないだろうか。そこで本稿では、以下の3つの論点から考察をおこなった。

第一の論点は、結婚の現状について把握するための結婚と離婚の変遷について統計データを用いた考察である。結婚を視野に入れつつ特定の相手と安定したつきあいを続けているにも関わらず結婚に踏み切れないでいるカップルは、結婚に対してモラトリアムな状態にあるといえる。こうした人々は結婚に対する積極的な心性と消極的な心性の両方を持っていて、結婚に対するきっかけをうしなっているといえるだろう。

第二の論点は、これまでの家族社会学における結婚研究のレビューを通じて、夫婦関係をどのようなものとして捉えていくべきかを再検討することである。平等な夫婦関係はどのように築かれているのか、結婚とはどのようにあるべきなのか、といった関心に支えられた戦後の夫婦関係研究は、多角的な視点を持って学際的に展開されていた。しかし、社会学者の関心は夫婦の「関係」から家族の「機能」へと移行していき、核家族モデルがたてられたことによってその方向性はより明確なものとなったのである。人々が日常的に用いている家族にまつわる言説にまで広げて分析をおこなう研究手法に対する認知は年々高まっている。これは従来の家族形態や機能の変化にまつわる議論ではなく、家族についての事象をより広範かつ詳細に論じることができる新しい視点としてその重要性が指摘されている研究スタイルである。とりわけインタビュー調査を用いた言説分析は、アンケート調査などではすくいとることができなかった生活上の実感や日常性を反映したデータを効果的に集めることができる手法として現在普及しつつある。夫婦関係が社会的な側面と個人的な側面のふたつのルールによって規定されていると考えるならば、「結婚」によって特定のルールを与えられた夫婦というカップルは、社会的な要請にこたえつつふたりの親密さを保つということを通じて、夫婦という関係を日々達成していると位置づけられる。

第三の論点は、インタビュー形式による調査をおこない、結婚という秩序がいかに構成されているか、という視点から言説に注目した分析をおこなうことである。高度経済成長期以降、恋愛期間を経て結婚、出産するというライフコースはほぼ定着してきたとされる。そうではなく「順番が逆」になって妊娠が先行する結婚は「できちゃった結婚」などと呼ばれ近年認知を深めつつある。インタビュー調査および分析では、結婚の意味はまず夫婦の間で共有されるという前提にたち、そのストーリーを把握することを目的としている。夫婦の会話を録音したものをデータとして使用し、会話内容に注目した分析をおこなった。妊娠先行型結婚当事者からの意義申し立てを中心とした分析をおこなっている。妊娠先行型結婚は「愛情が先か、子どもが先か」をめぐる評価がゆらいでいる。

以上の分析を通じて、このゆらぎに着目するための視点として、恋愛結婚イデオロギーと嫡出制の規範がとりあげられることが分かった。現在の結婚は近代家族イデオロギーによってしか正当性を獲得することができず、近代家族イデオロギーの中で近代家族が再生産されているという図式の中に自らおさまる形で結婚を語らざるを得ないという状況を反映しているものだといえる。今回あらためてこうした結果が出たことは、家族や結婚の多様化は研究者が想定しているほど進行しているわけではない、ということを示しているといえる。現代の日本社会において結婚を作り上げているメカニズムを明らかにするうえで、相互行為や相互理解を直接の対象とし、人々が共有している解釈装置の析出をする方法論を選択することで、これまで取り出すことが難しかった結婚のリアリティを析出することが可能となるといえる。